

# すいか（トンネル早熟）

## 栽培暦

月	2	3	4	5	6	7	8
作型							
トンネル早熟	穂木播種	接木	鉢上	定植			収穫
	台木播種						

## 栽培の特徴とポイント

定植期は気温が低いので、低温に耐えられる健苗の育成が必要である。定植後一定期間はトンネルを密閉し、生育の促進と低節位の雌花分化を抑制するが、換気時期が生育のバランスをとる上で重要なポイントとなる。土壌の適応性は広いが、乾燥に強く湿害には弱い。着果以降梅雨期となるので排水対策を徹底し、梅雨明け後は土壌水分が不足すると果実肥大が劣るので水管理に注意する。

## 品 種

### 1 穂 木

縞王マックスKE（大和）：果実はやや腰高で、平均6~7kgの中大果実である。肉色は、鮮濃桃色で着色早く、糖度は11~12度でシャリがある。低温伸長性が強く、低節位からの雌花の開花と花粉の出が良く、着果しやすい。成熟日数は6月で40日、7~8月で35日程度である。

縞無双（神田）：果重は7~8kg。やや硬めの肉質ながらシャリ感があり、食味は良好。果肉色は濃桃紅色、果肉と果皮との境目がハッキリしている。低温期の花粉の出が良く、着果しやすい。収穫期までの積算温度は約1030度。登熟日数は、6月出荷で40日、7~8月出荷で35日前後を目安とする。ハウス栽培~トンネル栽培に適する。

ニューこだま（黄）（タキイ）：果重1.8~2kgで、果皮は鮮緑地に濃緑の細縞、果肉色は濃黄色。糖度は12度と高く肉質は柔らかい。草勢は強く、開花後36~38日で登熟する。

ニュー赤こだま（神田）：草勢は中位、過繁茂による雌花の不揃いが見られず着果は安定し、裂果が少ない。果実は1.5~2kg、正球形で濃緑地に縞が入る。果肉は鮮やかな朱紅色で果汁多い。

### 2 台 木

FR長寿（大和）：青枯萎ちょう症に強い抵抗性を持ち、低温伸長性がよく、つるぼけしにくい台木用かんぴょう。草勢が比較的強いので、基肥はやや控えめとし、中・後期の分施とする。

## 育苗管理

### 1 床土準備

前年のうちに田土に完熟堆肥を混合し堆積しておく。肥料は過磷酸石灰を2~2.5kg/m<sup>3</sup>、床土配合肥料2kg/m<sup>3</sup>施用する。床土はpH6.0~6.5、EC0.2~0.5の範囲とする。よく切返し、土壌消毒しておく。

### 2 育苗床準備

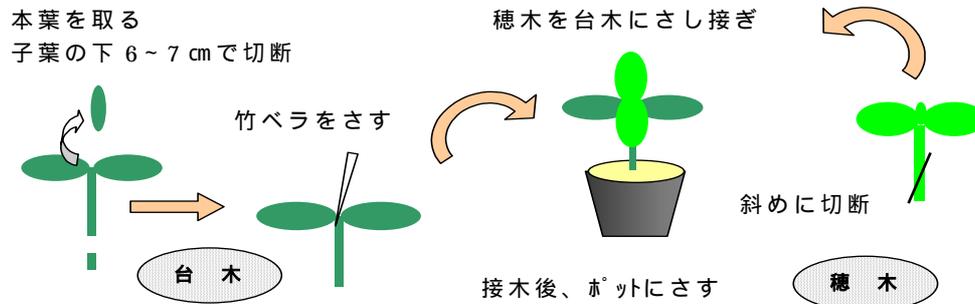
育苗床は、ハウス内に10m<sup>2</sup>程度準備し、播種床は80w/m<sup>2</sup>に温床線を配線し、床温25~30℃を確保する。接ぎ木床は、台木又は穂木の播種床を利用する。鉢上床は、70w/m<sup>2</sup>程度配線し、床温20~25℃を確保する。

### 3 播種

種子量は、10a 当たり穂木 400 粒、台木 500 粒必要。条播きで間隔は、穂木で 5×1.5cm、台木で 9×3cm 程度とし、覆土は軽く 1.5cm 程度とする。台木は、穂木より 7 日程度早く播種する。発芽後は、日中 25 前後、夜間 20 前後に温度管理し、光に十分当てる。

### 4 接ぎ木

接ぎ木時期は、穂木では、子葉が完全展開して本葉が見え始めた頃で、台木は本葉の出始めから半分展開した時期がよい。下図のように断根挿し接ぎ法とする



### 5 接ぎ木後の管理

	当日	2~3日後	4~7日後	8日以降	定植5~7日前
遮光	90%	90~70%	40~80%	日中一部のみ	なし
換気	なし	朝	朝と夕方	自然にならす	外気にならす
温度	28	25~28	22~28	20~25	16~18

## 本ば管理

### 1 施肥、深耕、畝立て、マルチ被覆

4 月上中旬頃、耕起前に基肥を全面に施し、できるだけ深耕、碎土し、幅 4m の畝をたて、整地しておく。畝に湿りのある時にポリマルチをかけ、早めにトンネルをして、事前に地温を高めておく。

### 施肥例 (kg/10a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥			成分量		
						N	P	K
完熟堆肥	1,000	1,000						
苦土石灰	100	100						
発酵けいふん	300	200	100					
やさい硝加燐安333号	40		20	20		5.2	5.2	5.2
ミドリトップ	100	100				6.0	6.0	7.0
尿素	20			10	10	9.2		
B M 熔燐	60	60					12.0	
硫加	20			10	10			10.0
合計						20.4	23.2	22.2

基肥のミドリトップは畝中央部のマルチ下に施用。追肥は5月下旬に施用後培土畝立て。

追肥は草勢と着果により時期と量を決める。

## 2 定植

1) 定植時期 4月下旬

2) 定植方法

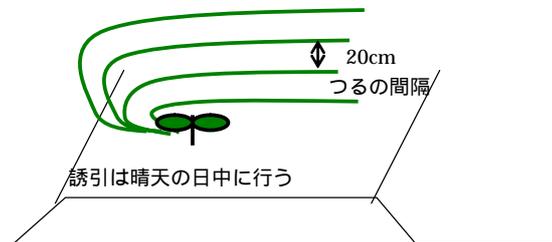
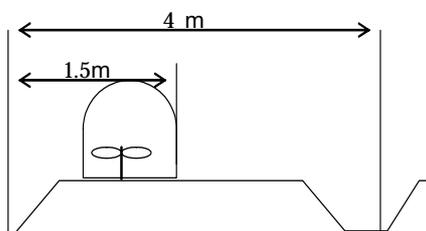
本葉5～6枚が定植適期であり、苗は定植1～2時間前に十分かん水しておく。定植は、温暖な日を選んで行い、鉢土と畑土が密着するよう工夫し、接木部が埋まらないようにする。

3) 栽植方法 畝幅 4m×株間 1m×1条植え = 250株/10a、程度を目標とする。

4) トンネル被覆 定植後は、直ちにトンネルをかけ、密閉保温する。

## 3 定植後のトンネル内の温度管理

生育ステ - ジ	管理上の注意点
定植後 10～12 日	密閉するが、30 以上にならないようにする(日覆)。
定植後 12～20 日	換気を始める。
定植後 20～25 日	徐々に換気を多くし、最低気温 13～14 になる頃にトンネルを除去。



## 4 敷きわら

1 回目はトンネル除去直後、整枝、誘引との同時作業になることが多い。2 回目は追肥 を施し培土してから行う。いずれも均一に敷き、厚い方がよい。

## 5 整枝、誘引、摘果

5 月上旬、本葉 8～10 枚で親づるを摘心する。同時に株元から本葉 2 枚目までの子づるは取る。子づるは、長さが 30～40cm の頃に揃ったものを 4 本残し、先端を 20cm 間隔で並べる。整枝、誘引は晴天時に行い、処理後に防除するとよい。子づるが 1 m の頃に孫づると一番花をすべて取り除く。次は、18～20 節に 3 番花(着果用)が着蕾した頃に孫づると 15 節以下の雌花をすべて除去する。

## 6 人工交配

6 月上旬頃、18～20 節の雌花が開花するので、前夜から比較的温暖な日に、早朝開花した雄花をとり、午前 7 時～9 時までの間に雌花の柱頭に交配する。

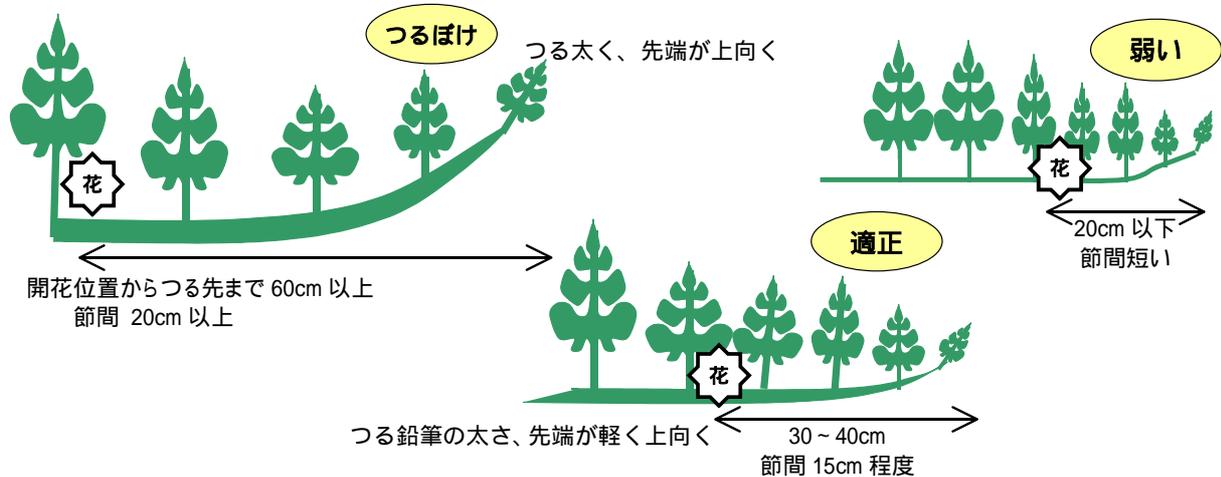
## 7 着果棒立てと摘果

果実が鶏卵大になった頃(開花約 7 日後)に、形の揃った果実を株当たり 4 果残して他を摘果し、10 a 当たり 1,000 果に整理する。残した果実に日付けを記入(3 日間隔が適当)した着果棒を立てる。着果節位は、16～20 節あたりの 3 番花が理想。これより低節位だと玉が小さく扁平果になりやすく、高節位だと玉がふくらみすぎて変形果、空洞果、裂果が増加する。

着果節以降は原則として放任とする。生長点には根を張らせるホルモンが存在するので、あまり摘芯しすぎると収穫期につるが持たなくなる。また、強すぎる場合には摘芯することにより根の活動を抑制できる。

## 8 かん排水

排水が悪いと疫病やつる枯病等の病害の発生が多くなるので、特に梅雨期のほ場の排水に努める。梅雨明け後、晴天が続く、土壌水分が不足するようであれば、早朝又は夕方の涼しい時間帯に、かん水し、水が行き渡ったら速やかに排水する。ただし、収穫5日前以降は行わない。



## 9 玉なおし

果実の直径が10~15cm程度の頃、花痕部を下に玉直しを行い、同時に下に台座を置く。また、果皮の緑化を均一にするため、収穫の10日前頃に果実を横にする。

### 収穫

早期着果は、約40日、8月収穫は約35日で収穫期となるが、着果期間の積算温度(1日の平均気温の加算)による試し切りをして収穫する。大玉スイカは積算温度でおよそ1000度、小玉スイカで850~900度が目安となる。

収穫した果実は日光に当てないように、調製、出荷作業を行う。

### 病虫害防除

梅雨期は、疫病、炭そ病、つる枯病が発生しやすいので、6月上旬より防除し、発生を見たら治療剤を中心に散布する。また、排水を図り高畝栽培とし、マルチ被覆をする。

害虫は、油かすを使用した場合、タネバエの幼虫の食害に注意する。アブラムシが育苗中やトンネル被覆期間から発生することがあり、ハダニは梅雨明け後に発生が多くなるので早目の防除を心がける。

### 販売のポイント

高品質(高糖度、食感の良さ)をアピールする。高糖度の果実を栽培するには登熟期に土壌水分を切り、草勢を抑えて管理する。また、小玉品種を上手く活用して販売するのも良い。